

昭和戦前期『音楽教育研究』『音楽教育』総目次

信時裕子

はじめに

明治生まれ、大正～昭和期の作曲家・信時潔（のぶとき きよし）の研究のため関係資料を集めている。1939年（昭和14）創刊の『音楽教育研究』という雑誌を手にしたところ、信時潔が作曲募集の選評を書いたり、信時作曲の作品が掲載されていたり、関係する記事が比較的多いことに気づいた。さらに詳しく各号を調べてみると、信時潔の人脈が動いている、という感触があった。巻頭言を多く執筆している片山颯太郎は信時潔の門下生で、この雑誌の中心的人物であった。

新訂尋常・新訂高等小学唱歌の教材解説、芸能科音楽などをも扱った、音楽教育の現場に直結した内容を持ち、およそ三年半の間に全42冊刊行され、雑誌統廃合の折には教育部門における唯一の音楽雑誌として残されたにも関わらず、戦後の研究でこの雑誌について言及している文献はほとんど見あたらない。『日本音楽教育事典』（日本音楽教育学会編 音楽之友社 2004）でさえ、その項目もない。

『音楽教育の証言者たち. 上 戦前を中心に』（木村信之編著 音楽之友社 1986）の中で、わずかに触れられているが、団体名称や人名、事実関係が混乱しているなど、正確な記録とは言いがたく、さらなる考証が必要と思われる。雑誌『音楽教育研究』『音楽教育』は音楽教育史において、その存在の形跡を抹殺されたのかと思うほどである。幸い全冊の所在が判明し、全号に目を通すことが可能とわかった。総目次作成は、ひとつには自分の研究のために、同時に今後の音楽教育史研究、日本洋楽史研究の材料としても役に立つのではないかと考え、今回の作業にとりかかった。

『音楽教育研究』『音楽教育』の概要 （*引用は各号編集後記による）

1939年（昭和14）10月創刊。編輯者は音楽教育研究会（代表者 大村弘毅）。発行所は大日本図書（代表者 杉山常次郎）。「前々より音楽教育雑誌を出さないかとのお勧め」を受けていたところ「時局下の音楽教育の重要性を思ふ時、斯道のため指導精神をもてる月刊雑誌を刊行することの意義深きといふよりはより必要なるを痛感して」創刊された。2巻9号より「用紙の無駄を省くため」予約販売となる。3巻1号より発行所が日本出版（代表者杉山常次郎）となる。3巻(1941年)8月号は「諸種の都合により」休刊。9月から11月号は刊行され、ここまでの通算は25冊。3巻11号(1941年12月号)より『音楽教育』に誌名変更。雑誌統廃合により「関係当局並に日本音楽文化協会のご指導のもとに、文化翼賛の一助ともなり、決戦時下、健全なる国民音楽の育成」する雑誌として再出発すること

となった。編輯兼印刷人は大日本出版(代表者 河村敏雄)。発行所は大日本出版。改題の翌月 1942 年 1 月は刊行されず、2 月号に「本号は 1, 2 月合併号とした」とある。改題後計 17 冊を刊行。1943 年(昭和 18) 5 月、「紙もまた兵器である事を諒といたし、過去への愛惜もすべて一蹴して」(「終刊の辞」)終刊となった。

凡例

1. 旧字は新字に置き換えた。ただし人名に限ってなるべく旧字を残した。かなづかいは、旧かなづかいを生かした。
2. 記事タイトル、著者等は、原則として掲載ページから採録し、必要に応じて [] で補記した。
3. 目次の掲載順によらず、雑誌の冒頭からページ順に配列した。逆ページの部分も、冒頭からのページ数、小～大の形で示した。ただし一連の特輯記事の間に入る囲み記事などは、特輯記事の後に配列した。
4. 目次で取り上げられていない同誌の原稿募集、及び広告などは収録しない。
5. 特輯名やコラム名は、目次にしか書かれていない場合にも、必要に応じて補った。
6. 連載の記事タイトル、著者、回次等は、なるべく統一的に表示した。「未完」「承前」等の用語で連載を示している場合や、回次が省略されている場合、[] で補った。
7. 文字の明らかな誤記・誤植等は訂正して [] で補記した。ページ数の誤植は正しいものに置き換えた。
8. ページ付けの無い【巻頭楽譜】、【口絵写真】などは、雑誌の中での配列がわかるように、冒頭から 0(1), 0(2), 0(3)・・・の仮ページ番号で示した。
9. 目次に表示されて、本文中には表示されていない巻頭言、詩、童謡、随筆、座談会など記事タイトルに付記された語は、< >を付けて適宜補った。また、記事タイトルから楽譜又は歌詞であることが判断できない場合は[楽譜][歌詞]の語を補った。
10. 各記事の隙間や、空白箇所、多くは囲み記事として散在するいわゆる「雑報」は、目次には現れないが、■に続けて記事見出しを列記した。

#

「総目次」は、別ファイルをご覧ください

#

あとがき

個人的に取り組んできた作曲家・信時潔資料研究の途中で、少々横道にそれて、今回の調査を行ってみた。そもそも、この雑誌と信時潔の関係に気づいたのは、第 3 巻第 4 号(1941 年 4 月号)の「皇后陛下御誕辰奉祝歌」を偶然見つけたのがきっかけだった。信時の場合、雑誌が作品の発表の場であった例は極めて少ない。なぜ突然(に見える)ここに発

表しているのか？と探しているうちに、なにか関係がありそうだと直感し、全冊に目を通した結果、関係記事が多数見付き、巻頭言を多く書いている片山頼太郎が、一番の接点であつたらしいことが、わかってきた。

単に信時執筆記事、信時潔についての記事が多だけでなく、信時が興味を持っていたテーマが多数取り上げているという感じを受けた。信時を評して「石橋を叩いて渡らない」ⁱと言われたように、例えば作曲上の新しい技法を知っても、すぐそれに飛びついて実践することはなかった。その分、次世代の人々に、あれこれ可能性を示唆し、助言していたことは、当時接した人たちの証言からもわかっている。信時が興味を持っていたテーマ、例えば唱歌指導について、青年と音楽について、児童歌劇について、あるいは先駆者瀧廉太郎や伊澤修二について、などなど。それらについて、誰に書いてもらってはどうか、こんなテーマはどうか、と話していた姿が目には浮かぶ。

信時門下生や親しく交流のあつた音楽家も、執筆者・作曲家として多数登場している。片山と三人で交互に作曲募集の審査をした下総皖一。渡（のち夏目）鏡子、柏木俊夫、長谷川良夫、益子九郎、澤崎定之、宮内（のち瀧崎）鎮代子。

信時が芸術院会員に選出された時には、「帝国芸術院（第三部）新会員の横顔」として、片山による「信時潔先生を語る」が掲載されている。また、朝日賞受賞を機に組まれた特集「特輯 信時潔氏を語る」（第5巻第3号・1943年3月号）は、ほかの音楽雑誌にはあり得ないことだつた。おそらく記事が「朝日賞受賞記念特集」と大々的に歌つたものであつたら、信時自身は大いに気を悪くしたであろうが、そこは信時という人を知り尽くした人（おそらく片山頼太郎）が手を尽くし「信時潔先生を語る」にとどめ、編輯後記にひっそりと「朝日文化賞として、音楽部門から信時潔氏の『海ゆかば』が受賞された」「本号は諸氏の稿を得て些か之を記念した」と書かれている。

私が、ひとつのテーマ「信時潔」で、この雑誌に目を通し、さまざまな情報を得たように、さまざまな研究課題が潜んでいることだろうと思う。この「総目次」が、今後の研究の手助けになれば幸いである。

なお、この「総目次」のタイトル中の「昭和戦前期」は、戦後にも『音楽教育研究』という雑誌があつたため区別するために「戦前」としている。（戦後の『音楽教育研究』は、戦前の同名の雑誌を継承したものではない。）今回の目次集作成にあたって、創刊号から順に読み進むうちに、「戦前」ではない、まさに「戦中」であると思える記事が増えて行き、「戦前の」という言葉に違和感を覚えた。しかし、「戦前・戦中の」とするにしても、どこを「戦争の初め」と考えるか—ということもあり、それもまた難しい。あくまでも戦後の『音楽教育研究』ではない、終戦以前に刊行されていた『音楽教育研究』とその継続後誌『音楽教育』の目次集であるということ、お断りしておきたい。

最後まで疑問のまま残つたのは、この雑誌の位置であつた。この雑誌に先立つこと16年、1923年に創刊された『教育音楽』という日本教育音楽協会ⁱⁱの機関誌があつた。戦時中、終刊あるいは廃刊を宣言したのかどうかは未確認だが、1940年末までは続いている。しかし、翌1941年12月、雑誌統合の折に残つたのは、歴史の古い日本教育音楽協会の『教育音楽』ではなく、音楽教育研究会（編輯）の『音楽教育研究』であつた。しかしながら、音楽教育史では、ほとんどこの雑誌『音楽教育研究』『音楽教育』や、そこに掲載

された内容について言及されてこなかったのは何故だろうか。おそらく、機関誌『教育音楽』の日本教育音楽協会の会員であった井上武士や小出浩平が、戦後「復権」「復興」した事情によるものだろう。人脈が繋がり、組織として直接のつながりはないものの、結果的には日本教育音楽協会という名称を引き継いだⁱⁱⁱ形となり音楽教育史の1つの流れとして扱われてきた。一方の雑誌『音楽教育研究』『音楽教育』の中心的人物であった片山頴太郎は、戦後「音楽教育」に直接かかわりを持たなくなり、東京を後にし、出身地の関西に移っている。『楽式論』『音楽通論』『対位法』『和声学』などの翻訳を手がけた作曲家・音楽理論家として、後進を指導することに専念した。冒頭に、この雑誌は音楽教育史において、その存在を抹殺されたのかと思うほどである、と書いたが、音楽教育界全体が「大東亜教育音楽への精進」に邁進しようとしたことには触れたくない、戦後と切り離したい意識も多分に働いて、音楽教育史上、忘れられ、取り残されていたのではないか。

終刊号の編輯後記（きた・あきら著）には「新訂小学唱歌の教材解説にはじまった本誌の責務は、芸能科音楽の誕生と共にひと先づ其の幕を閉づべきであつたかも知れない。ここに本誌の脱皮が余儀なくされた。かくして危く蹉跌を免れて、教育部門に於ける唯一の音楽雑誌として再生して茲に二年、漸く本然の姿に復し得たる」とある。1943年という厳しい時期において、ぎりぎり許される表現で、このように書いた、その裏に隠された思ひは、何だったのだろうか。日本音楽教育史におけるこの雑誌の位置づけについては、諸賢のさらなる検証を期待したい。

末筆ながら、本目次集作成のため、東京文化会館音楽資料室、上野学園図書館、ことに山口大学総合図書館には格別なご配慮をいただきました。また、武蔵野音楽大学図書館の渡辺定夫氏、昭和戦中期の音楽雑誌記事一覧作成の先輩である小関康幸氏のご助言、ご協力をいただきました。ありがとうございました。

信時裕子（ウェブサイト「信時潔研究ガイド」主宰。日本近代音楽館勤務）

*ここに掲載した総目次は、文字検索が出来るようWEB上でも公開する予定です。詳しくは現在公開中のサイト「信時潔研究ガイド」<http://home.netyou.jp/ff/nobu/>でもご案内します。

ⁱ 例えば、下総皖一著「作曲家信時潔」（『音楽の友』1956年10月）

ⁱⁱ 日本教育音楽協会については上田誠二氏の「第一次世界大戦後日本の音楽教育運動--日本教育音楽協会の設立と展開」（『歴史学研究』2005年3月）、および「1930年代の音楽教育運動--日本教育音楽協会の活動」（『ヒストリア』2005年9月）に詳しい。

ⁱⁱⁱ 小出浩平が『音楽教育の証言者たち（上）戦前を中心に』（木村信之編 音楽之友社 1986年）のインタビューで証言している。